



竹書

巻

^ 13
8882



へ13
2882

門へ13
2882
巻



門へ10
2890
巻

やぬふほろわ序

ぶの才のくおは九分十分其中小純智賢福
 下戸上戸此各あり又才辨なるくも玉少疵
 百費の馬ももを架者馬の道はれどもくを
 者はをくゆり親は泣き他人を食す
 といひまづらまを親より近ひ他人三人寄
 れる公界知ごころ涼しいあつた時笠をぬき
 隠し中器あうし恥しむ程や理がゆえぬ様子
 よき深い事ハ向河お母親くもあつて母が
 山へ関許うら半中む杭が打ち統好し

北親石（つがひ）「瘦法師の酢ぬ味ちいおの煮みとく
 ありおと鳥鷄の中の福すくやの曹の北牡
 で似合もせぬ繪物とせどと嗤て先をさ
 ぶやうなぶども播（ま）のまゝしやうの
 見直し「ち海（うみ）を撰むに名くひと
 を誘らしん「そらつて笑く笑ふ打く福書
 笑多の種（たね）教（しゆ）ふ把（つか）であつてひびき
 集

北親石の瘦法師の酢ぬ味ちいおの煮みとくありおと鳥鷄の中の福すくやの曹の北牡で似合もせぬ繪物とせどと嗤て先をさぶやうなぶども播のまゝしやうのを見直しち海を撰むに名くひとを誘らしんそらつて笑く笑ふ打く福書笑多の種教ふ把であつてひびき集

目次

（七）

- 一 海鯉の頭も信（しん）じつ
- 二 盗人の賤（せん）じ
- 三 移（うつ）り定規
- 四 あふりつ（あふりつ）きあ
- 五 鬼（おに）もろも
- 六 用（もち）ひ縄（なわ）もれ
- 七 猫（ねこ）が（が）徳（とく）り（り）ふ

（六）

一
 二
 三
 四
 六
 七
 八

一 燈明の生下尻あぶる

九

二 瓢箪のうり物が出る

十

三 鶴峰古きもの

十一

四 冠くらのあつらひ

十二

五 藁芭のこころ

十三

六 法より理の 州の夏の家

十四

七 餘鬼をくぬ

十五

②

一 巻の甲より出せる

十六

二 書るよみ久しう

十七

三 藪より梅

十八

四 鈴りのうり物

十九

五 軍をて矢をく

二十

六 好くあつらひ

二十一

七 二階よりめづり

二十二

八 夕珠も雪の徳

二十三

九 ソ古もの 系より好く

二十四

十 古くもの

二十五

③

一 耳とつて

二十六

二 大馬路権儀うせゝる

二十五

三 井の中の蛙ちあゝらぬ

二十六

四 唇が花ハハハハハハハ

二十七

五 足もとこゝろも

二十八

六 月夜ふきぬらう

二十九

七 物をつらうて人のいたさ

三十

八 川中ふきどく

三十一

(把)

一 借財の地蔵が

三十二

二 善くうり

三十三

三 抄子の目も

三十四

四 八十のお習

三十五

五 中身

三十六

以上

世和支那
世話五州

万事ハ夢

海する者ハオホク

史記ナリ江子ガ管望
の教子あるはて雨
の牛と年ハるハ
て双ハつたか
ること子モ存カ

堪忍の忍の字ガ昔

程序山ハ何ハ
百の款ハハ
とモトクテ陪
の肉子ハハハ
をうどリテ
一司馬廷
一印成名遂身退
くハ天の道

(一) 海鯉の頭も信トウラ

子ハ三界此加。子申急にはあハ^注ども子のなると
泣人モ多し。あつたもあ子構へとは子持るぬひ
とれ捨詞。子不どれ度何ガ何路或人四十過^注ま
せんあやう。何首鳥の薬方もあう。是を信。あら
ゆる神佛へのま致。五層十雨のひなみかようて。
程多く懐胎す。七日子腹やんでなりと男^{オノコ}子うめ
と。雄^{オス}也斧^{ノコ}北方術砂存なく。生れぬ^{オス}子の襦袢^{オス}
ぶめ難なく息子。鼻筋さ。雨了再^{オス}塩あつく瓜の
蔓に茄子親み似ぬ子は鬼子り何ぞも^{オス}書ガ有る。

Blank lined page with faint bleed-through from the reverse side.

「端午の節の筆は」
「蟻の甚く天」
「農民、其の」

「條とつく西」

「むすのふれを」
「きて仲西の道」
「らてハなむ七」
「なし」

「狐年の威を」

「蛇の鼻を」
「の尾を」

「倭を」

「越多南枝」
「胡馬北尾」
「斯か」

「鷺」
「鷓鴣」
「鳥」

「十言七一致」

「一目之羅不能」
「鳥、得鳥之羅」

「是一月」
「天台釈文」

「言葉ハ多ク」
「理の極ハ一言」
「過ぎ」

「野々」

「胡馬」

「給尾」

「蛇」

「言毫」

「念」

「野々」

「天四」

「は」

「は」

蛇は一すうう大海を。そのきはら見申

うと一ひも鼻毛て晴蛉。露は五年亀も昔年北う

がき。瘡疹の術は二王の跨と潜らせ。肩さすう

抱た子。肩さ子も教られ。沙灘をまら。昔も腹

は替られぬ。啼子も目を見たり。猫が干鞋くも

え。やもふさす。大小のぬけ箱持と。せりもなま

や七里。おくもま子國も。童ぶさううて

牛がうら終ぬ時をも。野生ぬ経も。護まぬと

寺へ道も。て。名勢も力馬よのうも。牛の角

も。つらの洞も。ゆら。竹の子親も。まうりて。敵の

も。かきや三日。ソウか孫見んと思ひ。祖文極

と。よむき。焼し。孫か。下り。犬子かへ

ら。いへど。まより。かまゆい。ま引も。て。見ありも

神カ

(二) 盗人小贖

月教子提燈外圍志や小。小申一の園。少達。小親の

習。枝も。柱も。一七。紅。花。む。う。こ。心。う。て。ない。は

祖母も。ご。ち。看。ま。の。を。あ。ら。い。て。牛。も。も。も。も

踏。ま。ぬ。時。も。あ。ら。い。と。い。ま。も。旅。さ。せ。い。旅。ハ

通。つ。れ。せ。と。情。親。の。名。も。も。子。人。間。中。ん。さ。ら。傾。城

(二)

「千のよりのわが
 傍に人
 「次を求む
 毛の根身を常用
 て馬眼を求む
 「好まむ
 「善天早卒の
 「を扱
 物の不及かた
 大和同士の故
 「南を治むを牛
 を教す
 「あかの上あす
 我身の上
 保元物語の巻末

買す、益もあらず、社が、魚が、はりもあらず、かや、奥歯に
 おのたまさうんだ、扱て、さあ、ごら、く、あも、頼ふく、苦
 が、つく、バ、興、よ、ど、や、と、思、ふ、ら、あ、ふ、ま、ひ、す、に、は
 師、近、と、ら、ね、と、善、用、ま、い、ち、つ、と、申、と、バ、ぐ、り、ん、と、
 尾、中、け、猿、入、一、町、と、ぐ、は、八、町、也、花、で、む、り、お
 れ、や、よ、い、ふ、つ、ま、が、あ、れ、や、ら、里、廻、り、て、首、ご、け
 ち、や、う、多、里、の、測、主、漸、と、なる、悪、性、有、情、衆、生、志、こ
 り、お、雷、の、ま、い、い、れ、釣、り、を、り、起、て、は、呪、事
 針、を、花、ふ、積、で、も、た、ま、う、ま、い、い、盗、人、を、捉、て、え、れ
 バ、あ、げ、る、り、血、で、ち、を、洗、ふ、捨、げ、さ、く、あ、い、て、

「君君、お、ハ、臣、臣、う
 「ふ、ふ、う、家、子、初
 「天の、地、を、と、た、ま、
 「た、れ、お、ち、て、其、惡
 「み、を、う、
 「下、の、地、を、と、た、ま、
 「ま、て、う、鉄、を、う、
 「博、多、崩、道、也
 「人、ハ、北、で、名、を、守、
 「人、ハ、殺、し、て、名、を、留
 「約、死、し、て、皮、を、む
 「至、志、奉、
 「河、瀬、の、化、し、も
 「玉、金、の、所、が、み
 「火、金、(焦、熱、道、血
 「金、(畜、生、道、刀、金
 「鐵、鬼、道、
 「三、也、川

切ても捨らまを護摩成たつら治りやせん
 大分の銀つて祈禱すまや。お影うて息災の聖教
 せんぢりともせぼなめきあるに盗人の賤をう
 つ畢竟神々き祿のちらま、智恵ない子よち
 五ヶヶ隣借歩の借歩の招次めが便唆するゆゑと太
 刀取ハ根らすして縄正恨む。人が生食へといふ
 火が食もまうか
 (三) 杓子定規
 つまみ、身、み、て、蓬、と、麻、より、高、く、糸、に、ま、り、ま、ば、櫃
 も、番、椒、より、高、し、善、惡、は、友、み、よ、る、手、も、手、口、と、口。

人間の八苦
生老病死愛別
怨憎會 求不得
五陰盛

「三三界のくみ色
欲界色界無色界
父の存するに
志臣二君のついで
四鳥の別
美人の終るに
中流舟を失へ
新七千金(鷗冠)
邯鄲の夢
龍川の流
登れり
移居の性塵
千里の馬の行を
一人の向を

「和光同塵の世の中
和其光同其塵
(老を怪) 子孫
の老を怪
外さまあはれ
を和光とせし
おかしき世の中
おかしき世の中

「病中ふも草を食ふ事。位濃うはをなすも
雉子や若らまをくふ妙菜知て一病をちをせば
藪不剽の者どやとわんもやを神物之富は千里
一丈袖どやとりてむ抑やのや念やも草鏝を
がうらめむ瓢箪でなまぐけ押へ。銘刀みん人を
切ると云切まらるるりもわんもやを神物之富は千里
規。悪い事とを本らるる人をも必だ大まね前を棒
あふ。腕のつよきぞすさまき足もとのある
いらちよ退て通勢

④

安方より付薬をすし

目うら鼻くぬける極に利毒ありて志めもむも
踏ころさぬほどの律儀とのひうらと好色も味
がつくと毒くついで血移むま。念と逃がらるや
等閑がなく。箸下におくと肉を虫。木綿布子に
のうらら同みや落いで語りをして叙父が志の
む。私計でもなし。故に事案がきいら。何ちも町
にハ心中して死んだ者きくあふと。まぶ死なぬ
を自慢は。叙父が甥の志成らる。かまや鎌がいふ。
酒うらて尻きくもらるる。と尻ひらて尻を
ぶめるゆるる顔して去れう。然れ山家も

病中ふも草を食ふ事。位濃うはをなすも
雉子や若らまをくふ妙菜知て一病をちをせば
藪不剽の者どやとわんもやを神物之富は千里
一丈袖どやとりてむ抑やのや念やも草鏝を
がうらめむ瓢箪でなまぐけ押へ。銘刀みん人を
切ると云切まらるるりもわんもやを神物之富は千里
規。悪い事とを本らるる人をも必だ大まね前を棒
あふ。腕のつよきぞすさまき足もとのある
いらちよ退て通勢

石の袖子世の多し
北洲の千年も限
り
北俱盧洲と云
目の人壽千
年

命ハ我らもて
輕
馬人夏の虫也
九月子ハ卷を
一字千金

子黄雀と云
みみそおんち
ハふハ一徑と云
一ハんハ
漢皇章賢信
才善スハ
若者頑鰻と云

田ノ胤知ると云
在蛤と云
羊の歩み
壁如海院濯
羊至屠震歩
近死地人命亦如
是(摩何摩耶徑
ふもす年の貝
こそふやぬや
羊の歩みぬづき
ふもす(系深歩)

一犬虚を犬もバ
十犬実を傳ふ
一犬形を吠中もバ
万犬其声も吠一犬
虚を傳へて万犬
實を傳ふ一佛經
一蠶娘が糸

彩を垂りくふ漆言す程氣毒な物はちい言麻
いんぎんふ様ひして蛙の顔へ水呑もきし以唾
とやうらまあげ向ふうけるむく海腹客の時を二
度のちい人の百年やうや一度死んて身や二度
死なぬ坊主が悪けまね製家止も二九の十六胸
策用がしらとちづひいやく布施るい経手
製家止を障らぬ神ふ崇ね一十忌止や
石のひるとまづ待う年の事と何又愛と
譯ハあそこと悟り鑿とくば樞とんね猿智
ゑち男ハ鼈が夢くくやうよとと腹ど

物に漬くともしもばはをうては佛作く眼に
ぬと思へ腹もちちやぬふおぬし地生教よ志
こやふ論語よこの論語よまどばや是も懲
よるお坊と和むもばいから出さる銘分
の印で人の七難もくゆきど我が十難ハんえん
和うやや去人事と山儀もりひやうで針を
拵みぬる一馬年うて一是針どしと表がむ
けむちせぬ過へ改ふ憚事るれとやと子曰
てみまらるる向ふ神も矢が中もむを海邊で包
針あひちく埒がめて結さのやぶぬく

莊子
水子倫をかく
あはれかすかく
よろこばかす
ハ思ふぬく
あはれかす
入るる塞
宿る

もさめぬふ焼づらふふこまぬ悪性二五ふも
あき腐繩をわていひるをさん申もねし
介治の及ふぬほ自身毒を生セバあはれ
大形死なざはらまひ

(五) 鬼ふあふも

女子れ目まは鈴成まき眉目ま果報の下う
民あうて玉のあしあはる美女ハ愛女のこり
とはいつと年季れ悪根とるとひるい女房の
飾りこま年もねし可き錦ふとおぶこ五十に
なれや五十の縁がけ縁といふもめととは

は先身あど似る布と緯うら男と女うら
雌があうして雄の時をうらふ牡丹鏡の棚うら
あうやうな女房も季ごとと利敷てあ形も
あうやう高うても卑うても裁縫うみつむ
あうよくせまむまの形がへあうらある利
のあひあはつとあまぬがうし姑あやうび
あう婦あうらあはれとあめと姑の中のみいは
あうけの不思議あ婦はあいかうひが四
うあう米糲のあうも可候がふ計をいふ
うあういとあまの瘡を生ど親あけ談で

子こ在あけぬも多おほし三さん寶たからもとて却かえりしつ産
ちよろりいと謂いやうな姑おばあも孫まごぬらして舅おやぢ
姑おばあが親おやぢずり大おほ切きりり厭いと忌いやも親おやぢの恨にく忌いや
と同じ姑おばあを年としのよもろと年としのひづみあふ
理こと性しやうがあく口くちで女おんないそをつうにこ柔な礎いしとく
とつり合あひつゝをぬとこ年としを盛もるべ
わとつり小こ舟ふねの志こころが通とほりこ權けんが廻まわらざこ楫こ
糸いとてあくるよおれこ皮かわひきやこ牙こが付ついてこむ夫こ
ち中ちゆうりまゝこ柱はしら日ひ初はつ見みてこほてこ帆ほあぢこ
漸しぜん元もとまへこ城しろをば年としが果はて浪なみもこうこびこり

程ほどふこゆめが姑おばあも年とし成なりて暑あつさ忘わすれや陰かげ已やま
れ吉きち柿かきが熟じやく柿かきとふらふ人ひとの立た席せきはこ鷹たか中ちゆう
ひとやうに居ゐすこりりておぬことこあつと水みづ海うみ
の鬼おにはあつてもまこせこここでこ酢すの良よ弱じやくのこ
小こるいひてこ煮にてもこ突つてもこうこまこぬこ練ね此こ
符ふうと思おもつこおこ味あじ留とどりも酒さけしこあこもこさこ出で
てこよこいこるこもこらこれこどもこ招まねが他た人ひとゆへこ臭くさくこ
うこもこめこてこんこまこやこ苦くしこ酢すでもこみこをこぞこ
くこつこまこぬこはこ花はな袖そでむこちこつこ報うちこ思おもふこハこハこコ
廻まわるこまこつこらこ。さこいこやこちこうこふこ志こころあこづこがこおこここふ

今五法うらまのくばうひ（一）なりはまされて下こ
をせあれみ鏡をえて鏡み（二）老てか子を
あさぐくと。思ひあをしりひばりううて板ふ
あはれにまうにさつくさうましして若さば
せさふ渾うせこいあし（三）寸短（四）ぬくやうな
人でも女房の酒やきばり（五）平生が剣（六）背（七）ま
はる

（六）田の二從はま

鬼（一）も十八（二）鬼（三）たげが（四）屋（五）は思（六）えし（七）夢（八）く（九）出（十）あ
り（十一）七（十二）の子（十三）け（十四）あ（十五）は（十六）も（十七）も（十八）女（十九）房（二十）の（二十一）す（二十二）け（二十三）雪（二十四）降（二十五）

の（一）眼（二）目（三）と結（四）ま（五）あ（六）ら（七）も（八）あ（九）ら（十）も（十一）あ（十二）ら（十三）も（十四）あ（十五）ら（十六）も
て七（十七）刺（十八）の（十九）ま（二十）し（二十一）あ（二十二）は（二十三）浪（二十四）さ（二十五）へ（二十六）出（二十七）る（二十八）時（二十九）年（三十）い（三十一）ま（三十二）ら（三十三）の
乍（三十四）も（三十五）治（三十六）定（三十七）あ（三十八）ら（三十九）ば（四十）人（四十一）を（四十二）盗（四十三）ひ（四十四）と（四十五）す（四十六）は（四十七）燒（四十八）亡（四十九）と（五十）公
場（五十一）燒（五十二）多（五十三）し（五十四）屋（五十五）物（五十六）銭（五十七）け（五十八）ら（五十九）ま（六十）如（六十一）ま（六十二）好（六十三）し

（七）猫の煙いらふ

若（一）う（二）も（三）あ（四）ら（五）も（六）う（七）ら（八）も（九）う（十）ら（十一）も（十二）う（十三）ら（十四）も（十五）う（十六）ら（十七）も
な（十八）法（十九）め（二十）り（二十一）み（二十二）ら（二十三）ら（二十四）ら（二十五）ら（二十六）ら（二十七）ら（二十八）ら（二十九）ら（三十）ら（三十一）ら（三十二）ら（三十三）ら（三十四）ら（三十五）ら（三十六）ら（三十七）ら（三十八）ら（三十九）ら（四十）ら（四十一）ら（四十二）ら（四十三）ら（四十四）ら（四十五）ら（四十六）ら（四十七）ら（四十八）ら（四十九）ら（五十）ら（五十一）ら（五十二）ら（五十三）ら（五十四）ら（五十五）ら（五十六）ら（五十七）ら（五十八）ら（五十九）ら（六十）ら（六十一）ら（六十二）ら（六十三）ら（六十四）ら（六十五）ら（六十六）ら（六十七）ら（六十八）ら（六十九）ら（七十）ら（七十一）ら（七十二）ら（七十三）ら（七十四）ら（七十五）ら（七十六）ら（七十七）ら（七十八）ら（七十九）ら（八十）ら（八十一）ら（八十二）ら（八十三）ら（八十四）ら（八十五）ら（八十六）ら（八十七）ら（八十八）ら（八十九）ら（九十）ら（九十一）ら（九十二）ら（九十三）ら（九十四）ら（九十五）ら（九十六）ら（九十七）ら（九十八）ら（九十九）ら（百）ら

ぬれぬき足しを添ふもいし。一寸きらりて
ニ寸知らず。是れ日事。國思君よおゆけ。主の
仰も親のいんも。まけずえを食へとも
其吐砂らむやうで。くさざらむ。點頭あ。
初の最後いんがの梁いんが。柱とちよめてもおどろきぬ
塩しほ粒つぶの火が付よい。心の約もほほゆるす那。
あそまきへ戒多事色ふあり。思おもせもあつる。
よい年してハ似暮もむいと人があふ。ちよこの人
あふ。目が思え。食くふあり。友を忘れ。賄賂
のハ誓ちか言ご試しをよす。

燕つばきせうハ歌うたし

少すく母はは世よは
唯ただ錢せんらおらふ
文ぶんゆるれ

① 地ちののてをを尻しりあがら

生なまあまは食くあり。あれやくらよ。けしあふ
ちひと鳥とりのあふ。ぬ日ひもあま。ボボもあも魚いさな交まじ
り田た螺らも鯉こいあ。やと。行ゆめと音ねらもぬりも
ちくあふあり。け。障さやらぬ。思おもらぬあがら

あぢきなく質おくまぐも志くば一生涯を
くもあり比身危の錦ありくるやうに足踏
ぐらち事あめと四不足うまへてあも巻七猿
が餅うみやうふきりしくま普生くふあり法
ぎ切二銭をつるあま燈明のまて尻あまるや
なぐくくとあまのうて出佛のああそし。
瘦らもすれいつあうらとぬまきくふ程も
るえぬくもまを持くらうあづも。爪火を
とや一月初教うまびをさし取事とく鬼
といもつとむごう所。老る事と犬といもあ

やらぬまで。毛の好くまの田七や詠時もや
詠とづくうまくりよ尻七結ぶぬ糸のやうな人
もあ皆て性のま質あうら我とまをせばなま
ね。隣まひーけまや寶こまけ教んまをえま
まの能をま本うぬるまがつけが号と弦との
差別がええてはあ友の親あるべうら又愛
へ生て来ふやう性。ま一佛とやらまのうらぶ
るし去が思せされてまづうらうら

二 亂筆うら約

昔の因果を思のふち成めぐる今は針の先を廻

人のうちと水のあはれをぬくものなれ。名をよそ人
喧嘩うら浪をへり。あはれ兵法大府の臺。新木の
ことよ西をまも。浅くつべし海を極の女を先
へ死せる山。度母を鳥ややまの身ぶらひききや
なれ。うらう生計は名の柱。うせくみ追つく多報
にありといへども。笑口へいそをれぬが啼りてま
ようくうや。妙子の名合よひつぶされ。名をを
うへ。名を替ふせりする。海をどく。空に打ちて
あふや。大木はあふべと地ふつう。だ。新木の死
ぬきど。種をつまぬとは。実きあづく。あうぬ。柳の

まぶられ。寶身のさし。名を。捨て。教とあれと。し
身捨。教と。ねり。一人。娘を。賣。て。價。取。り。報。り。し
敵の。ち。か。り。人。と。雲の。岨。道。水。玉。の。お。や。き。き。び。子。志
ら。ず。と。ぞ。ぬ。う。ら。う。娘。の。親。の。を。ま。き。き。だ。泪。も。神。の
え。ち。お。や。昔。の。つ。き。い。今。の。菜。加。研。賃。み。身。を。な
ぐ。れ。の。お。や。ら。る。せ。ら。く。て。ん。う。ら。う。馳。う。ら。う。人。を
こ。ま。く。た。硯。の。海。太。鼓。成。志。こ。む。時。戸。の。浪。男。此。お
て。娘。り。ら。る。小。は。酒。で。回。傾。る。傾。回。の。志。こ。ね。し。
習。う。ら。う。別。と。や。愛。み。田。舎。の。大。壺。ふ。と。ち。き。き
初。い。ち。通。ふ。足。の。裏。の。飯。粒。は。い。て。ま。な。ぬ。ぬ

中とぬる。粹さく涎め漏の目ニとはさぐらぬ
松の二天四天の器量と。若くは松もおさる
外も多きを忍山。松を根ごとく移り移る十一方
具那の勤の害くつるがせけは増えぬの出るの
あぞ清く守りやし生國家名あぬま物語。
うとバむぐの問まじ語りすむさくんと種が
りの足身んちまをそ積あぬぬが佛を身と名
あらしも盤み耳猫が喜ふんぐやに。格闘も
あい顔しておろなつき。孫の下智急とあ
あまの金のまじ法也。松をぬが孫とや比る

小居よと事置て煩悩即菩提其夜髪切て出て行。
文を見るより唾のゆめ誰か語らん品もあす
すむる功德共小成佛我も同く諸國修りも廻
る事。牛みひうれて善光寺系父の行旅も少ま不
しさ小部公籠の内とあやいなや。まふうる
身と成行ハ飄蕩うら約り出岩も花さく傷うや。
知識捨てこそ浮遊もあれ

三 鷓鴣相持

戦国策上鷓鴣と蜂の留まふりや雄お拒時ハ和
睡して泣るがよしいらの時ハせらふあふ。

食^くふもあいの口^{くち}悔^{くわい}ハ眼明^{がんめい}うあして耳きこえは
水^{みづ}母^ははみくせうして眼^{がん}あしつ^つ福^{ふく}と古^{ふる}せやあし
りてまゝかふ^か海^{うみ}船^{ふね}来^きるをえん元^{もと}を付^つれバ母^は
は氏^{うぢ}考^{こう}を考^{かう}て一^{いつ}ふ^ふあ中^{ちゆう}あうく^く迹^{あと}うくれぬ^ぬふ
れら^らは^は氣^きら^らすれ^れバ^バ給^{たま}ふ念^{ねん}以^いあひ^ひあり^り強^{ちやう}毅^ぎ朋^{ぽう}友^{ゆう}
の交^{かう}ふ^ふ羨^{せん}之^し意^いも^も實^{じつ}言葉^{ごんご}木^きハ^ハ木^{もく}金^{きん}ハ^ハう^うま^まと^とう^う
く^くな^なあ^あて^てハ^ハ物^{ぶつ}が^が救^{きう}援^{えん}あり^りて^てま^まる^るう^うを^をれ^れは^は犬^{いぬ}と^と猿^{さる}
あ^あら^らう^う女^{にょ}傍^{ぼう}筆^{ひつ}の^の不^ふ知^ちハ^ハ大^{だい}畧^{りやく}威^い勢^{せい}津^つと^と欲^{よく}づく^くと
あり^り我^{われ}が^が文^{ぶん}を^を少^{せう}徳^{とく}く^く欲^{よく}を^を四^し件^{けん}あ^あは^はれ^れバ^バ一^{いつ}生^{せい}言^{ごん}
分^{ぶん}ぶ^ぶあ^あい^いち^ちん^ん又^{また}有^あて^て計^{けい}も^もあ^あら^ら福^{ふく}と^と戦^{せん}場^{ばう}も^もて^て命^{めい}

を惜^{おぼ}ハ大^{だい}比^ひ怯^{けつ}者^{しや}武^ぶ士^しお^おや^やて^てハ^ハむ^むざ^ざと^と命^{めい}捨^すて^てら^ら
を^を抽^ひて^ては^はあ^あい^い君^{きみ}父^{ちち}の^の仇^{かたがひ}ハ^ハを^を抽^ひ除^{じゆ}申^{まを}す^すま^まば^ば一^{いつ}
朝^{あさ}一^{いつ}夕^{ゆふ}の^の仇^{かたがひ}ハ^ハ怒^{いかでか}て^て輕^{かろ}せ^せよ^よ憎^{にく}き^きの^のハ^ハい^いけて^て見^み
よ^よ我^{われ}人^{ひと}の^の存^{ぞん}つ^つら^らな^なれ^れバ^バ祢^ねて^てま^まく^く噓^{うそ}直^{ちやく}子^し守^{まも}り^りか
ら^らる^る門^{かど}口^{ぐち}の^の曉^{あけぼの}も^も用^{もち}あり^りう^うあ^あり^り時^{とき}ハ^ハ繼^{つぎ}母^{はは}
此^{こゝ}從^{したが}事^{こと}ある^る也^{なり}

④ 冠^{かん}指^{さし}あ^あら^らば

氏^{うぢ}より^{より}音^ねと^とは^は言^いへ^へど^ど名^な未^みの^の實^{じつ}生^{せい}と^と思^{おも}ふ^ふよ^よい
物^{もの}の^の種^{しゆ}あ^あら^らね^ねバ^バ名^な花^{はな}あ^あま^まだ^だ戰^{せん}功^{こう}立^たし^し人^{ひと}の^の系^{けい}圖^と
未^み孫^{そん}也^{なり}可^かの^の字^じで^で下^{くだ}ま^まを^をう^うば^ば奉^{ほう}用^{よう}ら^らる^るされ^れば

あや人として一代名と本代と思ひて身命とする
は昔ハむかし今もいまだとして徳のあやまり或は
又信臣の徳言などより引をあらうハ古冠と
はなぬきにすると同じ口も重慶をあらうて追従
程新助の華が廻りて考も引うとすまふも互
うと畏願して双仙がらあひなり願がまをまな
る下と互はさる儀の字儀より上へあられが一
中のふくくく。許江せんもいふし癖うて
人が若人の仇とあり猿も麻移らふ強助のとし
新しき草鞋と鶴取も用るが如し古き石塔ありて

も産てもしよとして薤北歴名とあられうり
お暇を乞ふ多うとむ鶴の代と鶴もつうもま
それの段のり福信の大木ハ用あうとま
二寄べうらむ山縣三市多備ハ鉄匠山本勘助
妙福嶋西波ハ騎みれ常守兵衛其名うくれ
数多の人の中よハ柱灰汁でみりいさやう
のハ希年う人つうや若つうふ主の子名ふも
助ろくめどや
⑤ 藁苞お金
あいの銭としなひとはりごとくむりて何

とらふくふよ勇者習者互べきも知はば明君はこ
れをゆきしして抱無れ堀出らる、幸廣とせむ
走くは大衆大公望をくはお能の秀者習者より
出て其名古今よりれあし今連七野の末山の
真まをぶわわい楠をこれと思ふべきのとわ
や弘法の代傳わわねやいと咽ずんないみる人
有りやせん雲徳の崩は一生業を念て命をよめ
歩翁のゆづい歩教子飽満居所あやうらまをこわのよりつりま
る也著と主君を強つよがよいと思いと七孫がなく
互といやあり思ふ、あらむ千費の鷹も放さふ

やとらば玉も琢らるや光らば玉らづ七千金也
り明て見られば多の廉れんも有が儀ぎよりるべし
⑥ 法子孫理あし
針も大名を走とまうら去まるあや武家の隠居平生
心が石部生者大名此去よくむんこやうでのつ
去りとしりうらわわがいらる海く今年廿日奉
公は仕傍恩ハ私づちと思へど人ようく皇さん
とゆりて眠とな公石に揺うけ扱あでふ包さ包と
するともんて七綱つなもて来ても家老ハうらう
て犬も傍家鷹も傍家ト也立多ハ詔を喝さぬと

いふ石の上も三年居れやぬくも。あては甘
露の目おまつと押去つめ油のあつと秋
ではすきぬ雨降つて地うらまら思案があふと
思ふよみ標藩とふお高き道の好を馳走よ
ゆすゆすでもききとをふく教まいつはる聖
人のゆき路ふえう事もないもくまじき切て法
んと合點が申うぬされど下子はまつい是て玉
從打混ぶてあくさむ或時振ふ坊丸を云いと標
がふ出さうし小庵從二萌こふとあせがね
ひねんや消されくと猿が俤もんぶり不つき。破

ふさーこの足船も法子のひずけりとあらる。
船のうららおおて。内へはもいらぬ鬼のふよ
こりいのが志ゆか法まかうこれぬがとゆ
ん

附り五人夏の塚

言てめが然しひ髪の蓋は意の歌。少不便を不
もあり夜船のぬけ落ふよの柱重罪。あし責
ての幸實てれ悦。自分の銀みておうふ事熱まふ
も冷まもちもまひと思ふうあらば我新ハ神玉
金銀銅鉄浮山あらゆへ中華およひ交趾暹羅

湯吧おんば伊集院いじけいんの長玉我兄と云ふ里の海路。高
と約もう十毎年暮来しゆきて高貴を仰ぐふ自由ある
のちのけり世是望の感充ちり金持て来る船か
あく皆おいていぬ多計未代もあつて船の吸う水
極みなりやせんされば毎船銀言の負教よの程
ふ所定あり其命の高貴うつくし停止なり夜人
いあくと愛とがまども橋があるては涙もまぬ
在も鳩もくく者ぞ知る下地たが又血をつけしぬ
け高貴猫も雛をえてしらへうね。去れうらち
め一らむらと狗をささめね船の目を去のび洋

中もそらあぶさあひ仕あふすまや言利者け故に
ハ目がえん狐の子ハつらどる孫まごつまらば夜
のあくふ妻子。口あめが玉をすすやせぬうちよ
子こ遊あそぶも回まわるも驚おどるやうりむら
搦なられは張はが繪馬えうま扣ひと極まま去いて金かねの貸かりか財ざい
近ちか古ふる上うられは首くびの鐘かね木き枝えつ。さうもも不利ふり大だい損そん
も先まが見みえぬ。うらち之のあふ沙さままき。乞こ
食くも世よの中なかようれどや。いふふ下したこで七日なな本ほんよ
生なれちうち日本にっぽんの海うみ者ものつらひ事をすくふと
人ひと言こともそらあふさあらど。ふくさも憎にくままり志こころえ

よ歌しへ根と絶ちて茶もうれよし

⑦ 餓鬼之人數

むごとも誅令一人の女珠よりハ三人の童を産
何れとも藝さへあまは馳走しや人まで世を
一人あり世の中は詔の鳴りぬを能はるものあり
函谷関と名ぎ趣きんとすよふも鳴されは鳴く
通さば彼路心ひりぬまねしと建ハ世とく思ひ
て人を遊しとてぞ福も年とけが用よま
ぬ女の布とまくと思ふふ細き糸よりまきさる
すしむる。是あふのちうらづきもくぬ世人も

りれよのまふ令としくもちのい名いよられぬ
や得ぬもまふあしぬ。一寸の虫も五分の魂あり
かおらの美聲。見届て目のやつらへむ肝心の用
まうらゝり足ならつあ方の損。下り坂まハ助給と
衆より坂まふくくらの親言と鬼の極なくと正
世の穀つが

人數が

蟻のまの ありま

餓鬼も

鯨魚やうめ

蚯蚓もあはれ

① 蟹を甲ふ似せしあなを堀
 賤めつ形もほもり巻をまくり或大名より十三歳
 此時あきれりくまゝ訪ひて存幣事終り
 家は等上向て海よりはいり初ももや
 君を歌もくは十歳物の古好にせまかしく初も
 とやせはまゆを初ん事と初むり何ぞ歌れ少
 さや家は古き名がひしと誠せんぶの二葉よ
 り香むしく山椒の小粒ても初と感トもふ果して
 十二ヶ玉のちまふ半のひしと初り盗跡と初し意
 と初て膠餅を思て兄盗跡がふりてふと時節

筒の鉢ぬきひし能もあむむとてみ初ゆ意の
 うつるふ老人のつらよき食餅をらんと若愚者
 おのちらひみ石づふの宿へ海蟹のまじりもむ
 ③ 若者のえしつら
 大石せうより小どりのさ。うらむい蛙もくし上見
 りや中がはい。一みをひみの高きさび。おどろもみえ
 しうらむ狐市の清きおどろ方こそ歴行。是は
 あふ状皆ひりす伏は虎も我を初しをれま
 下りて狐汁もむれは狐もりのせさゆにまふ
 と。坊みや鴨が初経しとやむ初とて歴行。大

あそびにせぶらうされ雑と智との感、備り蛭と塩
うけさやうふりてまふく逝吠跡を行なりあざ
の虫束お頭ちちやうずれ法法あり。主と虫下
を見て。志移がれ目く心の心。片全うて中空
平らくもあらず。作のを飼井之の端子を
うらうあらず。揚州志や振系も下うらうやく
主の感光さのうらと聞くあれや。急くこれ杖をう
らみてめく坊主あらずとふれ身のこれ
どもあらうの世體を世外にうらされて梯の上に
さらうらいて今う人の口にれ齒うらうらうら

③ 藪うら棒

智者はまどもば智者ハをれど。ならもつづけ
もうらぬこ。林のも喋紙を伏留ある事を知り
窺ふ手やをすて家内の人目さめて起りと
わらむ。おま。理功功学ありま上訴りが通場集志
うらうらいの道もつとまらずを梯ようらうらうら
足もとを見ぬゆへに藪うら棒がゆれも礎子をう
らみても御意する苦がらいまらず犬子うられと考ふ
灰汁のつれうすらおぢ。落武者ハ芒の穂も枯ら
ハ皆也。落武者ハ七久深さ二入計の溝川耳

幅下八針の板橋、花の住をあり申すと同く昔に
ありし其板橋より深一二百の深ありを深し
通れは是れいし橋志ありて深るゆゑ。一と打て
ぶんとおれ橋してつづとの跡を志あり。

④ 雁ヶ八百矢り之本

山を築しいまぶお一帯をほこまじしと申す及連に
と打やむ所ありよ山妙就すべうり山に
登る間ト一町あり此をのちれは移る屋あり似ず
終り嶺ありしと語跡も同し。之の坊まで来たの
つゝいざつづりしと申すあゝ夢評うらふらゝるるる



といふやうで。つづらくある所は雁ヶ八百矢り之本
先ウツさうし射とぶんでいあるは約として神
通し身をぎと死病ありあざなりともあり。談議説
法は多くの出家の身をき、劍術や鉄炮を鍛煉する
武士の身をき、盲目よりみつく大ありあるある
よあそしやうや、ねども杖とまぐりのおうり杖格出
しと打ちよお。沖舟よりやうみつく。凡お習う
うらつたの傍らなりと思ふは油跡はあらぬ

⑤ 軍見て矢を作

刺刀此などお始るとおおの志おきはるるありぬ。

明の鑑鏡を命ずるに其の言まじしに
と書き只案をておう妙なるは此の
あり治まらうも事とをまをせむ
ありもうわて治をかく。ソの四月の
あるうの十あるよと名見は見が
季の秋の百虎狼よりもぞおき
見え矢をせ起し人見え獲あふ
時の用も鼻でも殺して治と思ふ
とて去る心の法原で培ぬるに
有る社と矢聲のれんる。ぬらぬ
たカの名

しと怪び。是が守柱をぬて翌年うら
せとがはるがやくやらぬらぬ

⑥ ぬみ赤帽子

浮きハもふも重二寸先ハ周トヤ
徳宣。老よ。あはハのま。海鏡
頭トヤとソハ印通の友。目と鼻
のなり。あはぬ道ハ鏡がをし
おほくねハ社をかく。考はひ
ふとソハ。俄と路の高人
ハ千足の馬ハ狂ふ。狂人走
不狂人

の道を探して其晩年死なうとせし一ものうらゝの歌ふ
れとちちあきし。須弥序は帽子洗ふが聖人か
つ流す。すまたに毒をぶらし。綾子きて川土
すろとまよふを控へおろが。襦子と軟綿一信。
可有。ありて。泥田持で打さやうしして一生苦は
ハ口お。大もあまらや梅もあふ。けら至の百と
佛法。出えまけ。茶室北餅も強おやうまぬ。姨
の酒もうりをうふ。少みえし酒のつく事と。聞ら
べ方の換のちうぬ梅も白あせよ。五十年や十年の
苦多ハ遊免の刑。似合まぬ僧のうげうげすね

我がおろそけに主の力おちちうぬと悪くし
いふくせた。やとひもせぬ隣。けを梅もあたら
ずとややあられよとよ

⑦ 二階うら日茶さな

親うら此讓をうけあう。家業も倦ものハ利義は
先祖を能う名もや。百姓が武士もなうは。歴あ
がるも物。先祖との面目も建ても今叶ふをせし叶
すの望あり。何う好替ふ事と案下也。うの
上うら定帝。二階うら日茶さすや。昭新事す
ハ。毒のふ見。毛をぬりて疵をよとめ。永祈のまめ

つよなる志らぬ物^{あまの}もよりなる朱^{このか}籾^あ買^りす
二馬つま^い葉^はの^た神^{かみ}づ^みを^を解^かす^も切^きる^もた^たた^たが^よし
傷^や師^しと^と過^あ風^{かぜ}を^をあ^つぬ^ぐよ^い。誰^{たれ}が^どよ^いの^よも
藩^{はん}づ^らで^で葉^は松^{しょう}に^にさ^され^まい。う^うの^のう^うと^とい^いて^て鉄^{てつ}の
う^うげ^げて^ても^もち^ちな^なす^すぬ。な^なが^がを^をす^する^る二^二定^{じやう}の^の物^{もの}

八 文珠も筆の謬

猿^{さる}も木^きら^ら落^おち^ちる^る事^{こと}も^も志^しれ^れぬ。塙^{はたけ}能^の繪^え工^{こう}陸^{りく}軍^{ぐん}を^をあ^あい^い
敵^{たか}の^のよ^よ。葉^は松^{しょう}よ^よに^に必^{かなら}試^し衆^{しゆ}ん^んも。寺^{てら}よ^よや^やり^り井^い堀^{ほり}
の^のよ^よ。才^{さい}子^しよ^よあ^あい^いち^ちら^らせ^せし^しが。塙^{はたけ}は^は廻^{まわ}て^てお^おろ^ろす^す。
あ^あぶ^ぶち^ちい^いあ^あぶ^ぶら^らい^いの^のね^ねど^ども^もち^ちり^りま^まけ^ける^るた^ため^めさ^さり^り至^{いた}

て^て聲^{こゑ}を^をゆ^ゆし^し候^{まを}我^がす^する^るお^おぞ^ぞと^とあ^あい^いし^しや

十 寺のりり

空^{そら}う^うけ^け馬^{うま}川^{がわ}の中^{なか}う^うへ^へ存^{ぞん}す^す。高^{たか}士^しう^うく^くる^るえ^えん^ん
お^おつ^つあ^あも^もも^もの^の耳^{みみ}ら^らん^んで。又^{また}福^{ふく}の^の神^{かみ}の^のあ^あは^はれ^れす^す。
あ^あて^てん^んむ^むら^らめ^めと^と煙^{えん}馬^ばの^の針^{はり}た^たて^てる^るや^やも^もあ^あら^らう^う
島^{しま}へ^へあ^あづ^づる。あ^あら^らう^う僧^{そう}奉^{ほう}る^るの^のよ^よら^ら小^{せう}使^し志^しい^い
叶^かき。す^すり^りて^て問^とひ^ひし^しる^る木^きの^の竹^{たけ}つ^つい^いづ^づや^やを^を叱^ちや^やう^う
何^{なに}事^{こと}ぞ。され^れば^ば此^{こゝ}の^のむ^むづ^づり^りみ^み道^{みち}筋^{すぢ}の^の圃^ぼも^も塙^{はたけ}主^{ぬし}
の^のお^おせ^せり^り鉄^{てつ}く^くも^もを^をん^ん給^{たま}ひ^ひぬ^ぬ。一^{いっ}志^しづ^づく^くあ^あど
な^なも^もを^をて^て鐵^{てつ}鬼^きが^があ^あら^らう^うし^しあ^あら^らう^うに^に甚^{しん}き^きり^りん

小便し。坊主ハ水を口でこぼしうらみ寺か
ら里じや。熱して福の神。富貴を家さまに
あぶく我等祚のおひ正一丈えりぬ者。海濱で
と海を年うともあられぬすそぬとおじうに
せし之合点の法を備えん又言坊主とふねも
く坊主の髪もりんと復能よつて
おろしづらう

その津き子の神喜
寺ころ里ハ
経中まに来る

① 耳提て提

鼠と猫ハ瓜うくはとしよと首の垣のをき聾の立脚。
耳学問の人多あひ里て仗虎がまをりて釈迦の経。
弘明工軍法おさる。知し自悟は人あらぬ
跡があはちかして聲がさうなと。いふああ申とそ下
エつく西我う佛うとと。何をいふもあし
ちがれハ鬼のさす持。あつてをくひてさきくと
ツついとハあや名づきととあつとらひけはひ
塗ゆへあつとことよりそれとまけがあるや
糸と終いんが汝をまひと糸としと字を末と

而高の意。百少れハ^高地の字ハ^高いよりんて^水
とらいて^高いよりんてと^高いよりんて^高いよりんて
一兩二枚の雨の字で^高いよりんて^高いよりんて
ハやうふ耳^高いよりんて^高いよりんて
我^高いよりんて^高いよりんて

(三) 大黒柱^高いよりんて^高いよりんて

子^高いよりんて^高いよりんて
説^高いよりんて^高いよりんて
互^高いよりんて^高いよりんて
幡^高いよりんて^高いよりんて
か^高いよりんて^高いよりんて
や^高いよりんて^高いよりんて
田^高いよりんて^高いよりんて
こ^高いよりんて^高いよりんて
ち^高いよりんて^高いよりんて
ち^高いよりんて^高いよりんて

子^高いよりんて^高いよりんて
説^高いよりんて^高いよりんて
互^高いよりんて^高いよりんて
幡^高いよりんて^高いよりんて
か^高いよりんて^高いよりんて
や^高いよりんて^高いよりんて
田^高いよりんて^高いよりんて
こ^高いよりんて^高いよりんて
ち^高いよりんて^高いよりんて
ち^高いよりんて^高いよりんて

る名をさくちく古撰有りてハ伏ぬお取し類比奈と
預リ。望しむれぬ砂を乞て骨勝くくらふを蛙ハ
口うら吞まきし。割目きつぬ類が本のお志る

③ 井中の蛙大海をくくらぬ

錦北孔うらてをものそくやうおせまういんうらおとら
くういふてゆけバ何國神内ぢく新迦の祖父の姉弟
をみてはりの用りある又神儀文盲を人思思と瘧瘧のおつ
る神志ゆとすて社をたて答おす答を名を仏舍利うて
敷く何ぞ一毫つらむや取事いひおほくおれハ單のま
きに鈴つけてそれる尾鑿をつけて離すられつける

小敷とのぞもあう笑が木ののほる片ま地ま富貴のやうふ
なる早意河向の喧嘩うまふ若もぢぢぢど病めより見
る目でふある人の滅止ぐる天ふあまう星の敷をけ
の各五女をうらつを遠が一をまて名を何とふ星とや
と知くハぞうふその見おるがまをそ名ハ誰々のた
ぞ合点がゆめぬと不意ぐる連立てげてるをる人ぢぢ
雷も是がふまのうはちうとやとさくしてるをる雷雷提
の連連も若々あつたがあれど今も知し何の道もつ
ようせんさうすれハせいふどられぬ理窟此理もる
ぢぢハおらうぢぢ保ハぢぢやがよいそれぢぢハ

てすみ入らせけ

④ 雁が毛が秦龜七蹠蹠

走る所が有い。名をわの万石と云うやとあま
れなき方女と誣さん事を新ひ五位の四品に昇ん
とのむは敬ハ二職もあふべし一家を起たのそ
といやといわれむされど一井の蓋ハ一井入
事を知るねのつともしも不星有 雁が毛が
が女も毛がうが 蹠蹠の蓋へのがくして
らんや我をうへるも是事をしき

⑤ 是れとこのらるがう

着てソをげあか延べよ 半年もよど 半年も淀ま
あがむすつれ。七おみ人うごく。高ハ牛の涎。短
穿ハ換氣。月を結うわて股のて男あとり
我候の短氣。それをもささげんを留まりて道を
知短氣。候りのそ進急ぐハ常事とおもふ短氣
仁の短氣もは悔五

⑥ 月ねふ釜をぬう

油師張敷 猫の額の砥粒 祈うふ最あり 青蛇や豆腐
若神んぐもやあ 造人のひまのあもどあぐらの際
がない酒買ふて酒をききうけられ 月ねふ釜ぬ

これとなく酒をうけ取り。此方の道なき鳥が酒
をよ来りしとも羨しものなと云。くずの智恵は酒
よりく。酒を先ふくは。いさふ果ての梅もきり木
仁の用もふが

⑦ 我々身拾て人の痛しき
人をくくきや想が祈られぬ。くず人の身の上は
ハ我が身の上で地世界の身。我々が可きものなし
我々はあり人のいたさき。破くを忘るる
酒と酒流るハ酒神よりあせりえん哭まんよあ
病を苦させんゆきふ世の中より戸と他物なし

呑みあぐる。舌と唇と口と鼻と喉のあぬ者ハ
酒法ちと卑下とする。あんが無酒法とあぬと酒と
身を替古せどもあぬ但酒ハ身一管血をめぐらし
上戸の額角のあ。よもあつて酒をこのぞく。約束
不易の徳標をける酒のまひお代りすむは下戸の
走つるよ花のあし酒も哭ふもあつて叶もぬ重慶
斗代以来貴族は酒を渾然と却て氣血をふり
破さぬよ酒をさす神く酒雪も下戸ハ酒を酒
のこしんが死ぬるがより約束をとぐく口福又傷
の基身を換がず是ふはく毒あり何程もく

快きほど彼所へ是よりあさる某如しいう子あわると
て口をさしてそしきまのあしほをさるるあつて性
子のむ人を我とりが身をよくむよあしびやうま
くつよい加減りのめ

八 川中子ハまど人牛子ハたきぬ

或替世賢僧の重道還。こぶれや一夜よんどい日
行よよびああるああるを祝ふこあこの恨と先約
の方へあまうまやうりて座頭目の目言うつき佛十
あい堂へあさるやうりして七張らとほ云弦と云か
は。あもち揚りぬよ念念の経歌。樂感不祈をうら

あんの下の舞をすねとさゆりなる。いまぬとのが
き舞ふと信地をを替り言う世にあし隣りの
鼻揚子あつちがさよくはつとねよあまうてあま来
り梅も見ぬこし子娘母の沙汰。人あいま目代あき
笑とあまのやうふする中こあまうる某の鏡ゆり
やあすぶつて回ふ居られぬぞ。すれに祇おて世系
を揚あまやまいと敬ふよ見め。是の速感あま
いものがまふとられ。んよまの志が父子とむ
とあ少橋で出合うかふまあうとや極興あまの抽志
かり福ど。長いものあまきねお太いものあまきよ

トヤ^ト辰^辰負^負比^比無^無厄^厄ニ^ニあ^ある^る也^也と^と猫^猫が^が胡^胡桃^桃と^とま^まを^をは^は
さ^さふ^ふあ^あち^ちく^くぬ^ぬま^まさ^さち^ちく^くと^と面^面お^おう^うく^く
お^お膳^膳を^をぐ^ぐけ^けど^ど。犬^犬の^の尾^尾く^くて^て廻^廻る^るや^やう^うに^に。く^くど^どく^くそ^そい^いま^まを^を。
一^一座^座の^の人^人と^と尖^尖止^止づ^づう^う。友^友と^とす^すて^て下^下知^知と^とあ^あせ^せ。理^理の^のこ^ころ^ろじ^じ
こ^この^の地^地の^の一^一倍^倍ト^トヤ^ヤセ^セ。あ^あぞ^ぞさ^さう^うづ^づセ^セば^ば蚯^蚯蚓^蚓が^が出^出る^る。お^おの^の
ま^まを^をに^にゆ^ゆく^くや^や。お^おれ^れも^もひ^ひと^とり^りの^のこ^ころ^ろも^もぬ^ぬと^とや^やく^く
あ^あら^らひ^ひす^すす^すぬ^ぬ。い^いさ^さう^うひ^ひの^の降^降も^もあ^あら^ら。川^川中^中ま^まふ^ふて^て来^来
人^人中^中ま^まふ^ふま^まよ^よく^くひ^ひ。吐^吐も^もむ^むさ^さと^とな^なら^らぬ^ぬ。あ^あら^らひ^ひす^す
の^のさ^さし^し命^命。地^地害^害の^の大^大根^根よ^よお^おを^を治^治す^す。我^我が^が思^思ふ^ふす^す人^人
の^のお^おし^しよ^よ。人^人の^のふ^ふり^りを^をい^いは^はが^がら^らな^なを^を治^治す^す。

大^大く^くの^の人^人の^の心^心を^を換^換え^えり^りく

あ^あら^らひ^ひす^すぬ^ぬ

一^一の^のま^まを^をこ^この^のま^まお

(一) 倍^倍時^時の^の地^地を^を敵^敵海^海時^時の^のま^まを^を敵^敵

天子^{天子}諸^諸侯^侯の^の正^正身^身上^上す^すく^く天^天下^下の^の天^天下^下次^次や^や大^大丈^丈の^の臣^臣職^職
初^初め^め。古^古姓^姓の^の田^田地^地を^を人^人の^の家^家を^を治^治す^す。自^自身^身は^は治^治す^す
す^す。我^我が^がお^おし^しよ^よの^のま^まを^をこ^この^のま^まお^おし^しよ^よの^のま^まを^をこ^この^のま^まお^おし^しよ^よ
あり^{あり}或^或人^人を^を治^治す^す。是^是も^もあ^あら^らひ^ひす^す。海^海上^上の^の高^高ハ^ハ地^地

いくの金の一玉とび。あふりふ事、怪我の因どや
よい申ふ垣。口を物言あふりふ申せも賃とらね
ハ金うき^ど。油と^ハ薪ハ^ハ始末の^ハ汗心。新^ハ揉む^ハす^ハね^ハ今^ハを
不^ハせと^ハ石^ハお^ハ松^ハづ^ハきと^ハま^ハる^ハ身^ハ新。五代^ハや^ハ十代^ハハ^ハカ^ハ内^ハ社
て^ハ居^ハても^ハ楽^ハよ^ハ道^ハと^ハら^ハふ^ハよ^ハぎ^ハつ^ハと^ハや^ハう^ハと^ハて^ハ重^ハし^ハて
親^ハハ^ハ辛^ハ勞^ハは^ハる^ハて^ハハ^ハ樂^ハす^ハ強^ハを^ハ食^ハは^ハる^ハせ^ハの^ハ習。ソ^ハ後^ハを
の^ハ代^ハよ^ハ不^ハち^ハ路^ハ者^ハ世^ハを^ハ流^ハで^ハつ^ハと^ハど^ハハ^ハ階^ハを^ハと^ハむ^ハる。銀
さ^ハく^ハぬ^ハれ^ハハ^ハち^ハ先^ハで^ハ且^ハ神^ハ林。櫃^ハで^ハ危^ハき^ハと^ハ思^ハう^ハづ^ハう^ハ内^ハ外
の^ハ無^ハ性。少^ハハ^ハ天^ハ道^ハも^ハ名^ハの^ハが^ハり^ハあ^ハさ^ハま^ハ杖^ハの^ハ下^ハう^ハも
回^ハる^ハ子^ハが^ハか^ハも^ハゆ^ハいと^ハ思^ハ石^ハ懲^ハし^ハめ^ハの^ハあ^ハ極^ハて^ハ怪^ハ知^ハが

あきど。お^ハい^ハも^ハな^ハり^ハく^ハら^ハく^ハ。抱^ハふ^ハ繆^ハも^ハま^ハぬ^ハく^ハも^ハあ^ハく。
い^ハよ^ハく^ハ自^ハ在^ハの^ハ進^ハ退^ハ。世^ハの^ハ息^ハが^ハ天^ハへ^ハ上^ハり^ハ慈^ハ然^ハが^ハ仇^ハど^ハや
と。お^ハら^ハく^ハ世^ハの^ハ結^ハが^ハき^ハれ^ハて^ハ石^ハ頑^ハの^ハ品^ハを^ハ上^ハら^ハう^ハ。
時^ハ常^ハ臥^ハ床^ハす^ハま^ハや。お^ハら^ハく^ハり^ハ子^ハの^ハ損^ハを^ハて^ハ前^ハの^ハ垣^ハ
を^ハけ^ハや^ハう^ハ。焼^ハ名^ハを^ハあ^ハら^ハう^ハご^ハと^ハく。ソ^ハの^ハあ^ハら^ハや^ハす^ハの
陰^ハう^ハ久^ハ助。く^ハも^ハ新^ハど^ハ言^ハ揚^ハ技。あ^ハま^ハう^ハま^ハむ^ハま^ハに^ハ世^ハを^ハ
い^ハふ^ハれ^ハが^ハ針^ハを^ハど^ハる^ハ穴^ハう^ハら^ハ持^ハど^ハる^ハや。あ^ハや^ハう^ハま^ハん^ハが
あ^ハて^ハれ^ハと。ソ^ハの^ハ時^ハの^ハ地^ハ花^ハ顔。お^ハら^ハく^ハの^ハ名^ハん^ハま^ハ顔。ソ^ハの^ハま^ハぎ
せ^ハう^ハま^ハう^ハ洗^ハ着^ハの^ハま^ハぎ^ハく^ハも^ハま^ハく。帽^ハ子^ハと^ハ許^ハを^ハあ^ハら^ハり
あ^ハし^ハ神^ハハ^ハあ^ハれ^ハど^ハあ^ハい^ハ袖^ハハ^ハあ^ハら^ハま^ハぬ。志^ハを^ハん^ハ一^ハ枚。お^ハひ^ハが

の藤つた糸いとくも。そらとあけ。うさぬ恨うらみハハハハハハハハハハ
と見ても名ぬふ。よしとや昔むごうあられとさ
赴おもむ互たがひとあ。よいな味あじうね。夜よ宿とどれ神かみの敵たぐひまてとら
ふ柳やなぎ子こ質しつがあくよ銀ぎんをそと。あつおくまよま
らす。うさり所ところの歌うた。ほつあいつの神かみこのと。
このや恨うらみる。神かみの法はふを仙せんのつちもされまて。
佛ほとけの教しよも之これ夜よ押おしまやまらしめく。そでとほめ
柳やなぎよ。初はつくも先まへもゆらまほ。どんる鳥とりが盆ぼんの腹はらめ
むとやう。ぶんど事ことみさしけ待まちねの申まをうは。齋いはいも
絶た対たいもまづれ。一ひと町まちの福ふくうふて。めぐる因果いんぐわ

が湖うみましき。屋や敷しき三さん光みつ直ちか子この道みちえ。流なが星せうヤが。ちよ
こくと。よい事ことまらしめりの目めありし。海うみとあり電でん
とあり。臨りんセバこくふなど。惡あく事こと千里せんりをまら
てよくあな知ち

(二) 善ぜん美み堂だう下げ敷しき

回まわらる人ひと曰いあきふ人ひとまがくぐの廣ひろ物もの富とみ貴きを
人の心こころ入いて。名なを程ほどの人ひとあめをや。まんはと
正ただまふ如ごとく細こまる。尾お屏びんゆと高たかくま直ちかをハたてしす
終おしまもあわれ付つの物ものまらづる時とき命いのちをなれむむこ人ひと
をせても猫ねこ舌したでさきくや。あて志してゆるうんよ。

れうふ似ち物もあつてもあり古知がごとくその邪
か刀でも目刺のすいあつてと罵る人。我が本
道具ハ潜ふ人よ見せ。等うと置で等う教
し。妙業集の如き本也。時よよつてハ信よんてあ
れを教し。大の器でひよんとみあて。いれ
革師じやととてとやされあつても毒子のやがは
れく。自分のくまりにきうぬおとやと代の瘡江を
このむ^いま^いま^いを^い戴くとちうめん金取でうま
ぬ命いきとらふ。死人ぶらあつての換よと
うらむ^い解^いを^い引^い廻^いして危ぶきのうらやま。病人

源よの占。旅の法いふハ坤の卦旅の法いふハ乾の卦と。
あつて昭よしてやまどあつて不思議あまぬもあ
そが生をまやう死をまやうの玉途又旅の法
をさしがみこのやうにさしやうし高相の言下
ハ離の卦巽の卦。えどとて叫ぶ。陰陽師の
上志^いに^い陰^い教^いよ^い念^いを^いの^いんで^い危^い拂^いても^い少^い事^い
せりま。

③ 鬼の目も目

或人蘇生^い苦^い泉^いの^い物^い語^いつ^いた^いて^い腹^いを^いう^いて^い先^い
死んぶと思ふとそを安うつともあくひんり

と大なる河系へ出りて道を通るに上へ行
りて相洗焼する極楽へいとて多分とてつねに
れが鬼のいめ百の洗濯していそぐといと詠ふよ
こび音もすへいさづづ川の焼るい河中で
まぐやうれめよあつていみぢ小股もも猪とが
トヤ毒飯下程をつらむやと袂も五い六道の
ひこいふあをいつとて角の帯に糸を包む計と
やり多ねが是いつもせぬ事とと押戴きあき
が塞の河系いは津川流がい河多中へい津川と
七十也いはいくいけが極楽の海通右の神道が地

獄にいつらふい申す十王の毒所あきいて毒
るいと念いふい女いの地獄の沙汰もい沙いがす
と焼くいとあいふいとあいさいるいまいついまいれいの冥途
沙堂目の新いと者いらいるいやいりいていふいとい中いにいれいがい其
方いるいまいがい送い状いがい来いぬい申いへい終い極いもいといくいらいでいこ
わいらい七いちいちいぬい。皆い神いのいもいもいといるい。當いのいのい志いの
目一人許いすいて我い沙いのい深いみいつい時い地い獄いのい口いは
何い業い也いをい高いくいまいふいかいぬいといやい地い獄いもい知いくいといか
はいるいらいまいがい何い事いもい死いんでいおいやいすいめいといい。
いいがい地い獄い極いへい調い道いへいといひいのい言いすいていやい話いといい

見^ミ目^メ見^ミ仰^ウ付^フられ^レ汝^ニも^モ来^キる^ルあ^ハら^ハび^ビを^シれ^ル一
お^ウ上^ウ帳^ウも^モつ^ツり^リめ^メを^シ仰^ウ付^フせ^シ也^ナ程^ニに^シら^レん^ト
い^ハふ^ハに^シて^シあ^ハら^ハび^ビが^ハ法^フに^シて^シり^リ可^ク姓^ノの^ハ冷^レ飯^ヲあ^ハら^ハび^ビと^シて^シ
地^ノ獄^ノの^ハ名^ヲ目^ニ録^ス集^ムが^ハ方^ノ一^ノ切^ヲ下^シる^ル
る^ルと^シて^シ真^ノ途^ノの^ハ文^ノ字^ヲ猶^ホ少^ク判^スと^シて^シも^モ抄^テ信^ス
ト^シて^シも^モ抄^テ信^スと^シて^シも^モ抄^テ信^スと^シて^シも^モ抄^テ信^ス
して^シ地^ノ獄^ノの^ハ名^ヲ目^ニ録^ス集^ムが^ハ方^ノ一^ノ切^ヲ下^シる^ル
曾^テり^リ少^ク踏^ルた^ルあ^ハら^ハび^ビ五^ノ逆^ノ死^ノの^ハ科^ノ人^ノ賤^ノ鬼^ノと^シて^シ
只^ニ一^ノの^ハ枝^ノ蓮^ノの^ハ葉^ノの^ハあ^ハら^ハび^ビと^シて^シも^モ抄^テ信^ス
葉^ノの^ハあ^ハら^ハび^ビと^シて^シも^モ抄^テ信^ス

より早くひらき入るかと思ふに
鬼が驚くはむとてと鬼一口を
あつたる冥女思ふまじり地獄へ
の上の箸。御ども呵責の直組い
とらあしめとて思ふまじり地獄
陰救。於て憐れ目玉を法に。豆
今も爛れて鬼の目も涙もやと中
念もよあぢの介の法網法はく
申上る鬼の由房も鬼中出鬼
云来この男陰もあき也つたの
病あり。また

つを待つわも思をいそふるとある。口をぬき
にふれられあはれ。さといふ中さういふ語奉る
慈然、上うらと申。生を無兵卒の者ドや清之
あれと痛やうとわぬとさめくと泣かれ
とわれ申すもいふと厭うとん。どこの國より。
佛とあやうふした中とけ急なせいふいふなる
ふれど思の死んぶふやりあがたにはなはぬ
胸多きる初ころあく銀多幣至近判の教免状
到來は彼者今云渡邊の於て神の切かき
ぬ仏とせしむの佛物あり時よ長者の万端なる愛女

の一燈強に感ある也彼思活るといひて死んを
吐却を神の國のよき贅とてあまて吐て贅を
復て去るを幸ひ鬼よこぶとられと悦ぶま
ふり所あり俄に蓮花社にらへりや中宮
うら祐後が来るやら十五に泣き上るふらやら
憂も四月に一夜を上下とてそんえくす仏よ
ありても苦いもの由なり

④ 八十の事

世にふるといふととてさういふ
死ぬる長くとも二十八九まで死んぶらよとてい

廿七

一の老人の海に口いつちの法の夜さぬ
りえを水すき法書のくみされて角がとれ
すいも甘いもよく知て海にのちる程まづつと玉
糸を海にほもあうぶまたにほもといふと
即で石抱て淵へちまうるね事ハせぬ佛との
極楽世界へ性あるときけどもほもといふ事
不意なりすの都因をう京あり年を同より世
を同ハ八十の女智徳作同や胡椒の實うして
この日よ主人と実者ハ寺でも在家でも法を
樹一なりぬうまひおももふく。いひい

仏教の地獄

とていふ通
みすむのい

事ハあはれいと揚梅の撰舎し。法ハ
あれと男もぞ六十をさうせどさうさ
れぬ。世尊佛法腹合佛。とてとと命代も
りれ梅や立らぬ生うも死ぬも定事早
死さづも一息神仏さき出りり他法活
るも為る痛。宿福さき言がたれ、今時の人の千
九牛が突の山。百も法んぶら方おれ

五 豊年ハ

凡人よ浮沈七五五男ハ辱陰ハ碎らる
してハ用いさぬ或人好色は通して親の

うふ七年ふ
も法の華

をうけ^て塙^をあちせると^も遊^びた^りぬ。と^も空^に活^くと^もあり
木^をうら^げた^りと^も粒^のぬ^れ。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
十^方ふ^くれ^に遊^ぶる^の市^に立^てて^も高^くして^もを^きや^たら^ぬ。
肩^をふ^くれ^に遊^ぶる^の市^に立^てて^も高^くして^もを^きや^たら^ぬ。
確^りん。地^が傾^けて^も保^つと^もま^まと^もだ^ん。お^を怒^りて^も見
ま^ど阿^はふ^ふ以^て風^の渡^りも。中^にす^まふ^ふと^もが^も屋
う^らぬ^れと^もを^きや^たら^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
湯^をう^らぬ^れと^もを^きや^たら^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
ま^まの^れと^もを^きや^たら^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
お^を怒^りて^も見^まど^りん。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。

と^もや^と。人^をえ^こさ^れ。ゆ^りと^も抗^して^も終^りぬ^れ。
美^地の^れと^もを^きや^たら^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
た^けや。踏^みお^がと^もを^きや^たら^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
ハ^ハハ。踏^みお^がと^もを^きや^たら^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
と^も種^があ^りて^もと^もを^きや^たら^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
いと^も恐^ろう^なぬ。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
足^をう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
や^やや。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
こそ。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。
二^の山^をう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。と^もう^らげ^たり^ぬと^もあり。

共友

命を おごね。 濡子で粟をほらむやうな事あ
らうも おねぬ。 果報の 福を おねぬ。 甲子 あく あ
と ど う 幼 南 教 免 の 侍 役。 申 年 つ ら で。 土 元 十 五
日 に 立 向 つ。 月 上 三 日 の ま し 果 報 の つ ま し の
禱 の ま ち に 雑 言 つ ま り 國 中 の 双 ま き 富 貴 の 身
と ぞ ぬ ま る。 百 三 の ち の 海 も う ら で の 果 報 は い
お り く め で な り 〜

果報を おねぬ

〜

あき〜
〜
〜
〜

享保三戌戌年春三月日

大阪心齋橋順慶町

書林

敦賀屋九兵衛

饗庭篁村氏より借り受けた寫し取

干時明治二十五年五月二十六日也

